

## 縄文後の礼文島 ◆◆◆ 北海道独自の歴史の中での

本州では稻作の伝来を契機に縄文から弥生へと大きく変化するのと異なり、稻作が定着しなかった北海道では、縄文時代伝統の狩猟採集を基盤としながらも、雑穀栽培や鉄器の流通など新たな要素を取り入れた続縄文時代へと移行しました。この時代は、決して停滞した時代ではなく、縄文人が進出しなかつたサハリンや東北地方中部でも遺跡や遺物が見つかるなど、続縄文人は活動範囲をさらに広げ、活

発な生活を営んでいたようです。礼文島でも、浜中2遺跡やオショーンナイ2遺跡などでこの時代の遺物や遺構が確認されています。

この時代に続く擦文時代は、本州の古墳文化の強い影響を受けた時代で、カマド付きの住居、土師器の影響を受けた土器、鉄器の普及による石器の消滅などが特徴です。擦文人は中期以降、北海道南西部から道北・道東へと進出し、礼文島でも、香深井5遺跡では中期の土器が出土している他、重兵衛沢2遺跡や鉄府稲穂ノ崎遺跡などでは後期の土器が出土しています。さらに香深井1遺跡と沼の沢遺跡では竪穴住居跡も見つかっており、何度も渡島を経て、島に定住するようになりました。

一方、続縄文時代・擦文時代と並行して、礼文島

を含む北海道北部からオホーツク海沿岸一体に、両

時代とは全く異なる生活様式を持つオホーツク人がサハリン方面から南下し、オホーツク文化期の初期から後期にかけての遺跡が多く、礼文島内では香深井、浜中に遺跡が集中しています。中期から後期にかけて遺跡数も増えますが、末期の遺跡は少なく、加えて、擦文文化と接触して生活様式等が変化しつつ終わりを迎えます。

その後、本州では中世・戦国期を経て近世へと時代は移り変わりますが、中世の北海道については、本州側の文献史料の記載、北海道

南部の考古学的資料で知られる者は、その実態はあまりよく判っていないのが実情です。礼文島でもこの時代の情報は、残念ながら全くありません。礼文島が文献や絵図に登場するのは近世、つまり江戸時代まで待たなくてはなりません。江戸時代の礼文島は、現在のアイヌに直接つながる人々が暮らす島でした。島の地名もほとんどがアイヌ語に由来するものです。和人との交易、疫病の流行、アイヌ同士の争いなど、アイヌに関する事柄が、和人が残した文献や絵図、あるいは伝説といった形で現代の私たちに伝えられています。



### ●礼文町郷土資料館

香深港フェリーターミナルから徒歩1分の町民活動総合センター(ビスカ21)1階に併設され、礼文町の自然や歴史が学べる展示が充実しています。先史・古代の遺物は、縄文時代の遺物を中心に1階・2階と多数展示されています。



◎発行／礼文町教育委員会

礼文町香深村字ワウシ 礼文町民活動総合センター内  
TEL 0163-86-2119 (礼文町教育委員会)

開館期間／5月1日～10月31日

休館日／5月は月曜日(祝日の場合は翌日)、6月～9月は無休、10月は土・日曜日

## 北の島にいきた人々

### 礼文島の縄文文化



一昔前まで、縄文時代・文化といえば農耕や牧畜をせず、狩猟・採集を生活基盤とした原始的な時代・文化だと一般的には見られてきました。しかし近年、鹿児島県霧島市の上野原遺跡や青森県青森市の三内丸山遺跡の大規模な発掘調査などにより、縄文時代の人々の豊かな精神性や、日本列島の広範囲に及ぶ交流や交易など、縄文人の生き活きとした暮らしが明らかになってきました。礼文島でも古くから知られる縄文時代の遺跡があり、中でも平成10年、船泊遺跡の大規模な発掘調査などにより、縄文時代の人々の豊かな精神性や、日本列島の広範囲に及ぶ交流や交易など、縄文人の生き活きとした暮らしが明らかになつてきました。ここでは、礼文島の主な縄文遺跡から出土した様々な遺物と語り合いながら、島の先史時代をひもといいていきたいと思います。

# 礼文島にはどんな遺跡があるのだろう

礼文島では現在55カ所で先史、古代、近世の遺構や遺物が確認されています。時代が重複する遺跡もありますが、旧石器時代が1カ所、縄文時代が13カ所、続縄文時代が15カ所、擦文時代が12カ所、オホーツク文化期が18カ所、近世アイヌ文化期が7カ所となっています。

日本列島に人が住み始めて4万年もの時間が経過されたと言われています。北海道から見つかる旧石器は3万4千年前からのもので、礼文島でも旧石器時代末の遺跡も見つかっています。

北海道における縄文時代は、1万5千年前頃に寒冷な氷河期が終わり、温暖になつた1万2千年前頃から2千6百年前頃までの約1万年もの間続いた時代です。北海道最古の縄文遺跡は、北海道東部の帯広市にある草創期の1万2千年前頃の遺跡です。

一方、礼文島は氷河期には海面の低下により北海道やサハリンと陸続きでしたが、氷河期の終わりとともに海面が上昇、周りが海に囲まれて離島化したと考えられています。

縄文時代が終わると、北海道は本州とは別の独自の歴史を歩みます。主に弥生時代から古墳時代に当たる「続縄文時代」、主に奈良・平安時代に当たる「擦文時代」、主に鎌倉時代から江戸時代に当たる「アイヌ文化期」です。また、古墳時代から平安時代中頃にかけては、北海道北端からオホーツク海沿岸部に、在地の縄文系の人々とは全く異なる「オホーツク人」が渡来し、続縄文人や擦文人と緊張関係を保ちつつ棲み分けていました。

今のことろ、草創期や前期の遺跡は見つかっておらず、約4千年前頃の縄文時代中期の終わり頃になつて礼文島に初めて縄文人が渡り、住み始めたと考えられています。その後の後期と晩期の終わり頃の遺跡も見つかっています。

| 縄文時代     |          | 本州の区分    |         | 北海道の区分  |         |
|----------|----------|----------|---------|---------|---------|
| 旧石器時代    | 草創期      | 早期       | 中期      | 後期      | 古墳時代    |
| 12000 年前 | 11000 年前 | 10000 年前 | 9000 年前 | 8000 年前 | 7000 年前 |
| 6000 年前  | 5000 年前  | 4000 年前  | 3000 年前 | 2000 年前 | 1000 年前 |
| 現在       |          |          |         |         |         |

## 縄文の始まり——縄文人最初の定住地

# 上泊3遺跡

◆礼文島の縄文文化◆

で、どのような文化圏に属していたのかが判ります。

礼文島北東部にある上泊3遺跡は縄文時代中期末の集落跡で、堅穴住居跡や廃棄場跡などの遺構と共に様々な遺物が出土しています。中でも注目すべき遺物が円筒土器と呼ばれる土器群です。円筒土器は主に北海道南西部から東北地方北部に分布し、津軽海峡を挟むこれらの地域は、縄文時代前期から中期にかけて



黒曜石製の石錘

専門家でさえ日本全国から出土している縄文時代の様々な土器の形や種類を把握するのは至難の業です。しかし、出土した土器の形や文様、組み合わせなどを分析することによって、その遺跡がおおよそどの時代のもの



出土した石錘

円筒土器文化圏と呼ばれる縄文時代的一大文化圏となっていました。

このことから、上泊3遺跡の縄文人は円筒土器文化圏に属する人々であり、この遺跡が円筒土器文化圏の最北限の集落と言えます。また、この遺跡より古い時代の集落が見つかっていないことから、縄文人が礼文島に定住した初めての場所でもあります。なお、出土した石器のうち、石錘や石鍤が多く出土したことから、この地に定住した縄文人は海での漁労を糧として生活していました。

## 船泊遺跡

### アクセサリーエンブレムを備えた職人集落

礼文島の北部船泊  
湾の砂丘上にある  
船泊遺跡は縄文時  
代後期初めから中頃  
の遺跡で、土器や石器  
のほか、保存状態の極め

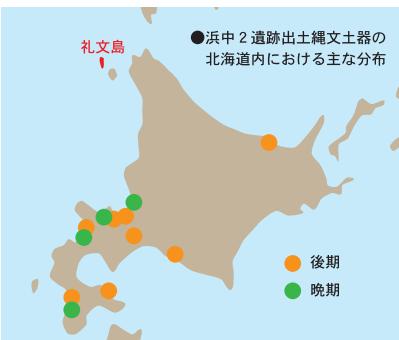
貝製平玉  
礼文島産のビノスガイの一番厚  
径1センチ前後の丸い玉です。

て良好な骨製品や貝製品が大量に出土しました。中でも注目を集めたのが数万点にもおおよぶ貝製のアクセサリーです。特に平玉は完成品の他に大量の未完成品や破損品が出土し、さらに穴開けに使ったメノウ石のドリルや砥石などの製作道具一式、そして製作跡と思われる遺構も見つかっています。つまり、船泊遺跡は貝製アクセサリーの製作技術を持つ縄文人が専用の工房を構えて暮らした集落だったと言えます。

ちなみに、出土した土器の特徴から、彼らは北海道南西部から一定期間礼文島へ渡ってきて生活していたようです。海岸で拾える硬いメノウ石を専用工具として活用し、今でもアクセサリーの材料となる貝殻が大量に流れ着く船泊湾の砂丘地帯は、まさにアクセサリーアクセサリーエンブレムを備えた職人たる船泊縄文人にとつて絶好の場所であつたに違ひありません。

◆礼文島の縄文文化◆



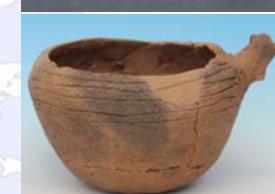


## 浜中2遺跡

**縄文の終わり——縄文人最後の拠点**

縄文時代後期の終わり頃、長く続いた温暖な気候が徐々に寒冷化していきます。浜中2遺跡は縄文後期の中頃から終わり頃、縄文晚期の終わり頃の2つの時代に分かれる遺物が出土しました。一般に気候が寒冷化すると人々は食料や居住適地を求めて移動する傾向が強くなると言われており、この遺跡もまた、アシカや鳥などを捕つて暮らしていたようです。さらに、船泊遺跡で大量に出土した貝の平玉や製作道具類、骨製の漁労具なども全く出土していないことから、船泊縄文人とは渡島の目的、生活様式が全く異なっていたと考







◆ 礼文島の縄文文化 ◆

## 波浪を超えた ダイナミックな交流と交易

**縄文の歴史観を塗り替える——船泊遺跡——**

船泊遺跡が注目を集めている理由のひとつに、礼文島では手に入らない様々な物が出土したことがあります。北海道内から持ち込まれた黒曜石やカランラン岩などの石材や、本州との交易を示すヒスイのペンダンクトや房総半島以南の海で採れるイモガイ、タカラガイ、マクラガイを使つたアクセサリーなどが出土しています。また、縄文時代には接着剤として使われたアスファルトや、北海道には生息しないイノシシの牙なども出土しています。ヒスイとアスファルトの大半は産地分析の結果、新潟県産であることわかったが、一部のアスファルトはサハリン産との結果も出ています。こうした本州産の貝や石などのいわゆる交易品は、おそらく礼文島へ直接もたらされたのではなく、船泊縄文人のふるさととも言える北海道南部を経由してもたらされたと考えられます。船泊縄文人は、大量の貝製品を手に日本海を行き来し、活発な交易活動をおこなっていましたようです。さらに、ロシア沿海州やバイカル湖周辺でも貝製平玉が出土しており、礼文島のさらに北へも交易ルートがあるとされています。また、南北の交易品として、新潟県姫川のヒスイ、新潟県産のアスファルト、イノシシの牙、主なイモガイ、タカラガイ、マクラガイの生息域、南方の貝殻、ヒスイの結先(もりさき)などが示されています。

3百年間に渡り貝製アクセサリーが北海道内や本州、あるいは北東アジア方面に流通していた背景には、現代人の想像を超える美への意識、身の回りを美しく飾りたいという縄文人の強い欲求があつたのかかもしれません。

◆ 礼文島の縄文文化 ◆











